



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第15主日 C年 (2022年7月10日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：申命記 30章10—14節

第二朗読：コロサイの信徒への手紙 1章15—20節

福音朗読：ルカによる福音書 10章25—37節

## きょう 今日

第一朗読の『申命記』は40年に及ぶ荒野の旅を終えるにあたって、ヨルダン川東岸のモアブの荒野でなされたモーセの長い説教で成り立っています。ヨルダン川東岸にたどり着いたイスラエルの民は、対岸にある「主が与えられる地」を見渡しながらモーセの説教を聞きます。この説教は、いわばモーセの遺言となります。ですから、『申命記』を味わう際には、聞き手がヨルダン川の東岸に立っているものとして味わう必要があります。

11節にある「今日」という短い言葉に注目してみてください。『申命記』には「今日(「ハッヨーム」)」という単語が数多く登場します。とりわけ多いのが11章の7回、29章の7回、そして今日の朗読箇所を含む30章の7回です。「今日」とは、ヨルダン川東岸でモーセが語ったその時を指すだけでなく、この箇所が朗読されたこの時、今の意味での「今日」でもあるのです。そうしますと、朗読の最後の「御言葉はあなたのごく近くにある」は、生き生きとした意味をもってきます。つまり、「今日」、「御言葉はあなたのごく近くに」あるのです。

第二朗読は初代教会にあって典礼の中で歌われていた賛歌(通称：キリスト賛歌)からの引用です。御子は万物が創造される前に存在していた宇宙の主である。そして万物は御子によって存在したと歌います。このような美しい賛歌が初代教会で歌われていたことに驚かされます。初代教会の人々は、イエスさまが十字架で亡くなられて、復活なさった出来事を過去の出来事としてではなく、「今日」、「今」の出来事として受けとめたのです。その結果、このような賛歌が生まれていったのでしょう。

福音朗読ではよく知られている「善きサマリア人」のたとえが読まれています。

33-34a 節の「見て憐れに思い、近寄って」に注目してください。「憐れに思う」は『ルカによる福音書』では3回登場します。まず、「主はこの母親を見て、憐れに思い『もう泣かなくともよい』と言われた」(7章13節)と、ナインのやもめの一人息子の物語に登場します。そして今日の福音朗読の箇所である善きサマリア人のたとえ話(10章33-34節)、さらには放蕩息子のたとえ話でも「父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した」(15章20節)とあります。「見て、憐れに思い、近寄って」はこの福音書独特の表現となります。

もともとの「憐れに思う」は「スプラクニゾマイ」というギリシア語の動詞です。これは「はらわた」を表す名詞「スプラクノン」に由来します。この動詞は新約聖書の中では12回使われています。いずれも共観福音書で使われています。そのうち9回はイエスさまの行為や言葉に当てはめています。イエスさまは重い皮膚病に苦しむ人を「憐れんで」清めましたし、群衆を「憐れんで」教え、食べ物を与えます。病人をいやし、汚れた霊に取りつかれた子どもを「憐れんで」治します。また、たとえ話では3回使われます。善きサマリア人のたとえ話と放蕩息子のたとえ話の他にゆるされたのにゆるさない僕のたとえ話で、主人は家来を「憐れに思い」ます(マタ18章27節)。三つのたとえ話に登場するサマリア人も、放蕩息子の父親も、家来の主人も神さまを指していると考えられます。神さまが人間に抱く思いが「憐れに思う」なのです。

そうしますと、今日の福音にある「憐れに思う」(スプラクニゾマイ)は神さま、あるいは救い主であるイエスさまにだけ使われる動詞となります。確かに、今日の朗読でのたとえ話では「見て憐れに思い、近寄って」介抱したのはサマリア人ですが、実はサマリア人という嫌われている存在に託して、イエスさまは「憐れに思う」神さまを伝えようとしたのではないのでしょうか。

イエスさまは、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」(26節)と問いかけます。これは「福音には何と書いてあるのか。今日、あなたはそれをどう読むのか」と問われているように思います。「善きサマリア人」のたとえ話に接して、「このサマリア人のように困っている人にとっての隣人となりましょう」という結論を見いだすのも一つの読み方かもしれません。しかし、ボコボコにされ道に横たわっているのは他ならない「わたし」なのだ気づいて、そんな惨めなわたしを「見て、憐れに思い、近寄って」こられるイエスさまに信頼する生き方をしようとするのも一つの読み方です。それこそが「今日」、わたしのごく近いところにある御言葉でしょう。